年間選者賞（令和二年七月号～令和三年六月号）

本田一弘選

小峰圭子（令和三年六月号）

少女らとすかんぽかじり登りにし交野山見ゆ遥か車窓に

「手の甲は根性焼きね、この傷は？」傷の在処をまず身体から

入所日の入浴前に検める傷ひとつずつ悲しみを持つ

悲しみを濾過するように降る雨か交野の里の少年院に

逃走を防ぐためではないと言い鉄条網は外へと返る

法務省所管であれば「君が代」を院長先生歌わせざりき

火事自殺逃走それら三大事故出さずに終えし幸い思う

少女らよそなたも母になりにしか桃の花咲くころは思うよ

●作者の言葉

この度は本田一弘先生の年間選者賞を賜り、誠にありがとうございます。

昨春やや早く退職しました。時の流れを少し緩めて暮らす中、折節に非行や犯罪の現場で出会った人々が思い出されます。駆け出しの法務教官時代に少年院で出会った少女たちは、社会の被害者的な側面を多く持ち合わせていたように思います。

伊藤一彦先生が選者をなさっている新聞歌壇への投稿が御縁となり、四年前「心の花」に入会しました。肩の力を抜いて、心を澄ませて、これからも詠ってまいりたい。

●選者の言葉

いろいろと悩んだ末に、小峰圭子さんの作品を年間選者賞として推すことにした。

小峰さんの詳しい経歴はわからないのだが、四首目にあるように大阪交野にある少年院に勤務したことがあり、罪を犯した少女たちと実際に接することを長い間なさっていたのだろう。希有な仕事の現場の歌で貴重だ。彼女らとの関わり合いや少年院の様子を静かに回想し、リアルに表現している。「手の甲は根性焼きね、この傷は？」と入所日に少女たちの体の傷を検認するのだが、その傷一つ一つに彼女らの「悲しみ」を見いだす。そのまなざしがあたたかい。八首目、桃の花の咲くころになると、少女らを思い出す。「そなたも母になりにしか」という言葉には深い愛情が籠もる。